



やさぐれ魚の
ぼうけん



文・絵： 橘 夢人

やさぐれ魚にげだす

これはやさぐれ魚です。

もとはまっすぐでしたが、いろいろあってやさぐれてしまいました。

でも、根はいいやつです。



やさぐれ魚はバレンタインデーの前日、大勢の兄弟たちといっしょに、お菓子屋さんのオーブンで生まれました。

作ったのは3人の女の子、ちづるちゃんとゆめちゃんとゆりさんです。

彼氏との初めてのバレンタイン。

気合いの入ったちづるちゃんは、お菓子屋さんの友達・ゆりさんにたのんで、バレンタインの準備をしました。

ゆりさんのお店のキッチンを借りて、本格的なケーキを作ろうというのです。

楽しそうなのでゆめちゃんもやってきました。

2人はゆりさんに教わりながら、ガトーショコラと生チョコを作り、クッキーも添えることにしました。

きれいな箱に入れられるのを待つ間、生まれたばかりのクッキーたちはおしゃべりをしました。

「どんな人に渡されるのかな？美味しく食べてくれるかな？」

と、うさぎが言いました。

「こんなにつやつやですもの。美味しいに決まってるわよ」

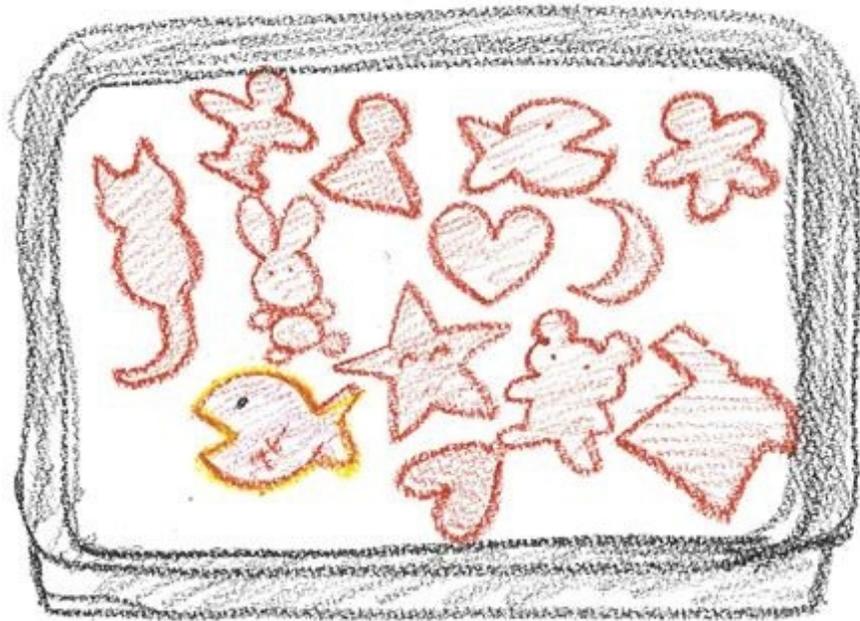
と、お星さまが自信たっぷりに言いました。

「ああ、明日が楽しみだ！」

と、くまが言いました。

けれども、やさぐれ魚はちっとも楽しみではありませんでした。

(俺は魚だぞ。海も見ずに食べられるなんてごめんだね。まるでクッキーみたいに！)



やさぐれ魚は逃げ出すことにしました。

そして、ちづるちゃんとゆめちゃんがおしゃべりしている間に、そっとテーブルからすべりおちました。

床にはねかえったやさぐれ魚は、うまく冷蔵庫の下に潜り込むことができました。

やさぐれ魚ねこにあう

夜になりました。

ちづるちゃんとゆめちゃんは、やさぐれ魚がいなくなったことに気づかずに、ほかのクッキーをきれいな箱に入れてリボンをかけ、きやいきやい言いながらもって帰りました。

ゆりさんも家に帰りました。

お店はしーんとしていて、クッキー1枚動く気配はありません。

どれぐらい時間が経ったでしょうか。

静かなはずのお店から、がさりと音が聞こえました。

つづいてひたひたと、何かが歩く気配もします。

あと思ったときには、やさぐれ魚はくわえあげられていました。

「何をする！」

やさぐれ魚は叫びました。

「食ってみろ！小骨が刺さるぞ！」

小骨が刺さってはたまりません。

相手はたじろいで、慌ててやさぐれ魚を放しました。

床にぼりと落ちたやさぐれ魚は、窓から差す月明かりの下で無礼なやからをにらみつけました。

灰と白のしま模様のやせたねこが、びっくりしてやさぐれ魚を見つめていました。

「ごめんよ」

とねこは言いました。

「おいしそうなクッキーかと思ったものだから」

「なんだと！」

とやさぐれ魚は言いました。

「俺をクッキーよばわりとはいい度胸だ！パクリとかむぞ！」

やさぐれ魚がすごむと、ねこはうなだれました。

「お腹が減っていたんだ。あやまるから、パクリとかむのはゆるしておくれよ」

ねこのお腹がグーとなりました。

やさぐれ魚はねこがきのどくになりました。

「わかった」

とやさぐれ魚はいいました。

「お前は本当に腹がへってるんだな。そこのチーズでも食べばいい」

「チーズだって！」

ねこは目をかがやかせました。

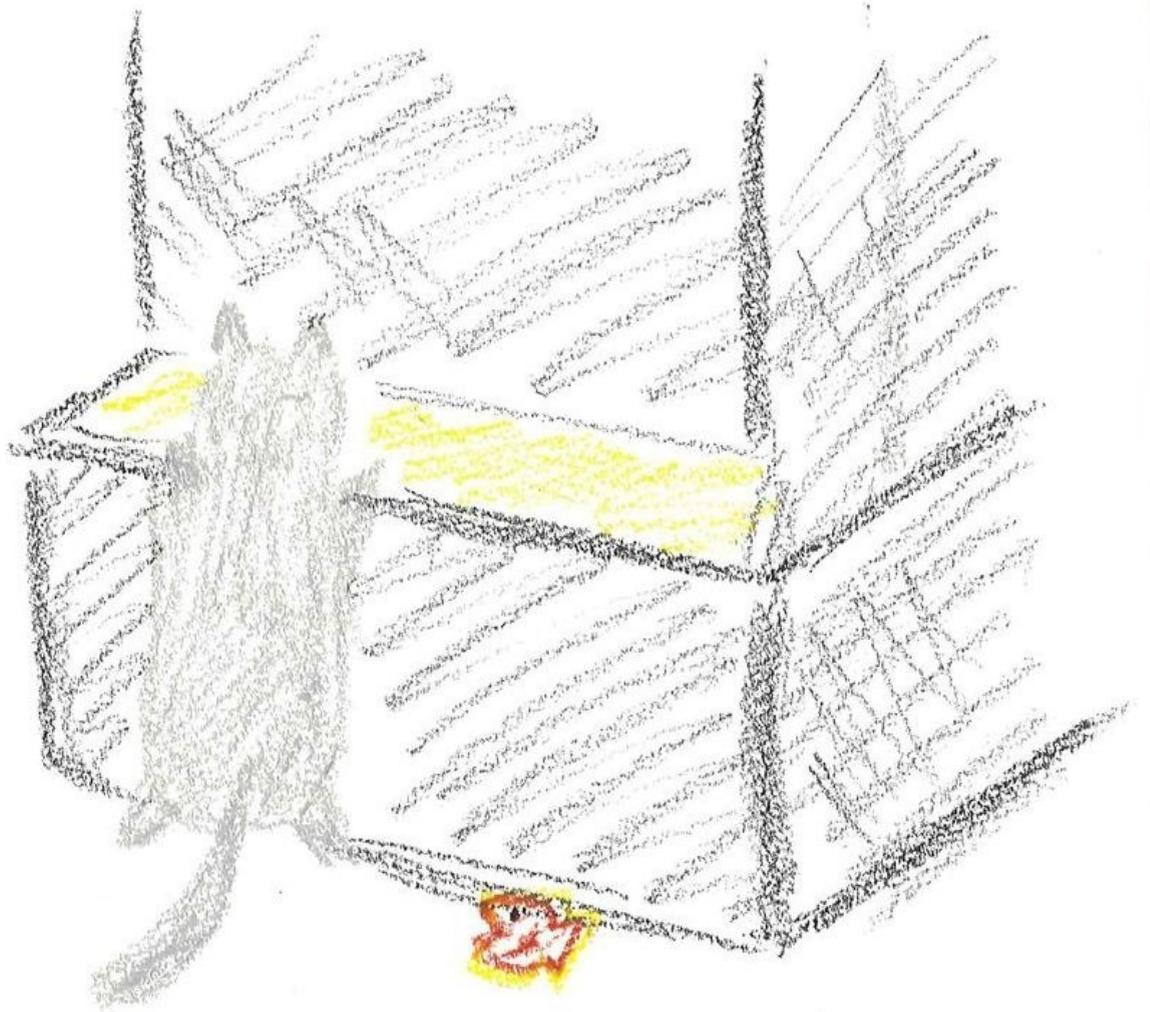
「どこにあるのさ？」

「目の前だ」

やさぐれ魚はしっぽでおおきな冷蔵庫をしめました。

「さてはお前、この箱のあけかたを知らないな？おしえてやるから、やってみろ」

やさぐれ魚は、ちゃんとゆめちゃんたちがあけるところを見ていたのです。



「どうもありがとう！本当にたすかったよ！！」

チーズでお腹をふくらませたねこが、満足そうにいました。

「何かお礼をさせてくれないかな」

「俺は海にいきたいんだ」

やさぐれ魚は答えました。

「俺をのせていけないか？」

ねこはちょっと考えました。ねこは生まれてこの方、このまちから離れたことはありません。海はとても遠いのです。

「ぼくは海をしらないからいけないけれど、」

やさぐれ魚ががっかりしたのを見て、ねこは慌てて続けました。

「でも川ならしってるんだ。川をずっといくと海にでるはずだから、川まで君をのせていくのはどうかな？」

やさぐれ魚はよろこびました。

「それはいい！すぐ出発しよう！」

ねこはやさぐれ魚をそっとくわえると、改装工事でわずかに開いた穴から外へ出ました。

アーケードのかかったせまい路地を抜けて、明るい表通りに出ると、

器用に首をかたむけて、やさぐれ魚を背中に乗せました。

頭の上には、まるい月が明々とかがやいています。

「いい夜だな！」

と、歩きながらねこは言いました。

「ほんとに君にはかんしゃしてるよ。これだけおなががいっぱいなら、ぜったいにあいつにも負けない」

「だれだ？あいつって」

やさぐれ魚は尋ねました。

「いまいましいちよろはげのやろうさ」

と、ねこは近道に公園に入りながらいました。

「あいつめ、僕のみけさんにしつこくつきまといやがって。しかも僕が腹ペコで弱っているのを
みるや、けんかうってきやがった！みけさんの前で！」

ねこはそのときを思い出したのか、ぶるぶるとからだをふるわせました。

「ちくしょう！呪われろ！」

ねこの叫びにおどろいて、電灯の下でごみ箱をあさっていた2匹のねこが振り返りました。

一匹は茶色であたまに小さなはげのある猫、もう一匹はきれいな毛並みの三毛猫です。

「あ！」

とねこはさげびました。

「ちょろはげ！貴様またしても！！」

ねこは完全にやさぐれ魚を乗せていることを忘れました。

「もうかんべんならん！！」

ねこは猛然と小さなはげのあるねこの向かって突進しました。

2匹は地面にころがって、とっくみあいをはじめました。

やさぐれ魚はぼーんと大きく飛ばされて、花壇のそばのこんもりした茂みの中にとりとおちま
した。

ねこは茶色いねこはしばらく取っ組み合っていました。ねこが耳におもいきりかみつくと、
茶色のねこは悲鳴をあげてにげだしました。

「待て！」

ねこはそれを追いかけてかけだしました。

あきれた様子で騒動を見物していた三毛猫も、ゆっくり歩いていきました。

やさぐれ魚はひっそりとした公園にとりのこされました。



「誰かいるの？」
ふいに、うしろからかわいい声が聞えました。
と思ったら、やさぐれ魚はだれかにくわえ上げられていました。
「何をする！」
やさぐれ魚は叫びました。
「食ってみろ！小骨が刺さるぞ！」
小骨が刺さってはたまりません。
相手はたじろいで、慌ててやさぐれ魚を放しました。
地面にぼとりとおちたやさぐれ魚は、月明かりの下で無礼なやからをにらみつけました。
ふわふわのぬいぐるみのような豆柴の子犬が、びっくりしてやさぐれ魚を見つめていました。

「ごめんね」
と子犬はいいました。
「かみかみクッキーかと思ったの」
「なんだと！」
とやさぐれ魚は言いました。
「俺をクッキーよばわりとはいい度胸だ！パクリとかむぞ！」
やさぐれ魚がすごむと、子犬はうなだれました。
「ぼく、まい子になっちゃって、家でたべたかみかみクッキーを思いだしたの。あやまるからパクリとかむのはやめてよ」
子犬はすっかりしっぽをまるめて、鼻をすんすんとすすりました。
やさぐれ魚は子犬がきのどくなりました。

「わかった」
とやさぐれ魚はいいました。
「俺が家をさがしてやる」
「ほんとに!？」
子犬は大きな目をかがやかせました。
「そんなことができるの？」
「できるさ」
やさぐれ魚はしっぽで子犬の首輪をしめました。
「お前の首輪をよく見てみる。その変な模様はたぶんお前の飼い主の携帯番号というやつだ。明るくなったら交番にでも行けば、きっと飼い主に連絡してくれるだろう」
たった半日とはいえ、おしゃべりな女子たちの話をきいていたやさぐれ魚は、よのなかのことをちゃんと知っているのです。

「どうもありがとう！ほんとうにたすかったよ！！」
すっかり元気をとりもどした子犬がいました。
「なにかお礼をさせて。ぼくにできることはないかな」
「俺は川にいきたいんだ」
やさぐれ魚は答えました。
「俺をのせていけないか？」
子犬はちょっと考えました。何しろ子犬は迷子です。川がどこにあるのか分かりません。
「ぼくは川をしらないからいけないけれど、」
やさぐれ魚ががっかりしたのを見て、子犬は慌てて続けました。
「でもぼくの住んでいた家の近くには川があったよ。よくさんぼに行ったもの。ぼくが家に帰れば、さんぼのときに魚さんを川につれて行けるよ」
やさぐれ魚はよろこびました。
「それはいい！朝になったらまず交番をさがすぞ！」



あくる朝、やさぐれ魚を背中にのせて、子犬は出発しました。

頭の上に広がる青空に、わたがしみたくなくもがぶかぶか浮かんでいます。

「いい天気だな！」

と子犬は言いました。

「魚さん、ほんとうにありがとう。ぼくどうしたらいいのかとってもこころぼそかったんだ」

「安心しろ。すぐ見つかるさ」

やさぐれ魚は言いました。

「うん、ありがとう！」

と、子犬は裏通りをちょこちょこ歩きながらいいました。

「あれ？」

小さな交差点に出ると、子犬は首をかしげました。

「ぼく、この道、しってる気がする...」

「ぼくと？ぼくとじゃないか！」

突然大きな声をあげて、少し太った人間が走ってきました。

「あ！」

と子犬はさげびました。

「じゅんぺーさん、じゅんぺーさんだ！わあい！！」

子犬は完全にやさぐれ魚を乗せていることを忘れました。

「じゅんぺーさん！！」

子犬は走り出して、飼い主の人間の腕に飛び込みました。

人間は子犬を抱き上げて、しっかりと抱きしめました。

やさぐれ魚はぼーんと大きく飛ばされて、道の脇の排水溝にぼとりと落ちました。

「こいつ、どこ行ってたんだ。心配したんだからな、もう」

じゅんぺーさんは子犬の頭をなでました。

「ほら、うちに帰ろう。もう迷子になるなよ」

じゅんぺーさんは子犬を抱き上げたまま、裏通りを歩いていきました。

やさぐれ魚は暗い排水溝にとりのこされました。

やさぐれ魚ピンチになる

太陽が西に傾きはじめました。

暗く冷たい排水溝のなかで、やさぐれ魚は絶体絶命のピンチにありました。

アリが集まってきたのです。

アリに食べられてしまうのは、クッキーにとってもっとも嫌なことの一つです。

「ああ」

とやさぐれ魚は天をあおぎました。

魚と生まれたからには海が見たい一心で、俺はお菓子やを逃げ出した。

ねこや子犬の手を借りて、なんとかここまでやってきた。

しかしそれもここまでか。俺はこんなところで、アリに食われて終わるのか？まるでクッキーみたいに！

「俺は海を見るんだ！」

やさぐれ魚は叫びました。しかし、アリはそんなことお構いなしに、やさぐれ魚を運び始めます

。

もうダメかと思われたとき、大きな黒い影がぬうっとやさぐれ魚をおおいました。

「海だって？」

影は低い声でそういと、やさぐれ魚をひょいと排水溝の底から持ち上げました。

なんだかツルツルしていてへんてこな触られごごちです。アリがぱらぱらとやさぐれ魚から離れました。

「どこのどなたか存じませんが。助かりました。ありがとうございます」

やさぐれ魚はふかぶかとおじぎをしてから、自分を持ち上げる影を見上げました。

闇のなかでもよく光る黄色の模様も鮮やかに、立派なキングペンギンが立っていました。



キングペンギンは名をリカルドといました。

南極大陸の北の島の生まれで、ある日群れから離れて魚を追っていたところを人間に捕まり、長野県の水族館に送られるも脱走。

故郷を目指し、はるばる山を越えて海への旅の途中だということです。

昼間は人間に見つからないように、排水溝や物陰に身を隠し、夜になると池で魚をとりながら、ここまでやってきたのでした。

「もうどれぐらい」

やさぐれ魚は尋ねました。

「逃げ出したのは秋の初めだった」

とりカルドは答えました。

みればリカルドの体は傷だらけです。ペンギンの足で山を越え、ここまでやってくるには相当の苦労があったにちがいありません。

やさぐれ魚はこの大先輩に、深い畏敬の念をいただきました。

「この近くに川があります。川まで行けば、海に出られます」

とやさぐれ魚は言いました。

「確かに水の匂いがする」

と、リカルドはいいました。

「ここであったのも何かの縁だ。一緒に海をめざそう」

やさぐれ魚とりカルドは、ひれで握手をかわしました。

夜中になりました。

リカルドは用心深く排水溝から出ると、暗がりの中をやさぐれ魚を抱えて歩き始めました。

人通りはありませんが、今夜も月が明るく照っています。

人間がないのを確かめて通りを渡り、いくつかの道を通って、家がたくさん建っているところにでました。

垣根や植え込みの間を縫うように続く道は細く、ところどころに思い出したような街灯の明かりが灯っています。

しかし、月は明々と輝いていて、塀の上を歩くねこまでよく見えました。

「いやな月だな」

とりカルドはいいました。

そのとき、ぴかっとまぶしい光がリカルドを照らしました。

同時に「いたぞ！」と叫ぶ声が聞えました。

「やつらだ！」

とりカルドは舌打ちしました。

「すまんやさぐれ魚。俺のヒレはつるつるで、お前をつれては走れない。お互い運がよければ、自由の海でまた会おう！」

リカルドは身を翻し、家々の植え込みの中に姿を消しました。

やさぐれ魚は宙を舞い、道端の電柱のわきにぽとりと落ちました。

やさぐれ魚カラスにあう

朝一番のひかりが、電柱の下にさしこんできました。

だれかにしつこくつつかれる夢で、やさぐれ魚は目を覚ましました。

見れば確かにだれかがしっぽをつっついていています。

「何をする！」

やさぐれ魚は叫びました。

「食ってみろ！小骨が刺さるぞ！」

相手はびくっとして、慌ててやさぐれ魚を放しました。

やさぐれ魚は、昇りたての朝日の下で無礼なやからをにらみつけました。

まだ羽もそろわないカラスのひなが、かなしそうな目でやさぐれ魚を見つめていました。

「ごめんね」

とかぼそい声でひなはいいました。

「おいしそうなクッキーだとおもったの」

「なんだと！」

とやさぐれ魚は言いました。

「俺をクッキーよばわりとはいい度胸だ！パクリとかむぞ！」

やさぐれ魚がすごむと、ひなはうなだれました。

「ぼく巣から落ちちゃって、とっってもおなかがすいてるの。あやまるからパクリとかむのはやめて」

ひなはすっかり元気をなくして、今にも死にそうな声でいいました。

やさぐれ魚が見上げると、電柱の上にカラスの巣があります。ひなはそこから落ちてしまったようです。

すっかり弱っているひなを見て、やさぐれ魚はきのどくになりました。

「わかった」

とやさぐれ魚はいいました。

「ちょっとだけ俺のしっぽを食わせてやる」

「ほんとに！？」

ひなは信じられないといった顔でやさぐれ魚に尋ねました。

「いいの？」

「いいさ」

やさぐれ魚はしっぽをひなの方に向けました。

「だが俺を食うからには、そんな辛気臭い面はなしだ。親が帰ってくればすぐお前を見つけてくれるさ。だからそんな顔するんじゃねえ」

やさぐれ魚はやさぐれていましたが、根はとていいやつだったのです。

「どうもありがとう！なんとお礼を言っているのか」

わが子を巣にとりもどせたカラスのお母さんがいいました。

「何かお礼をさせてくださいな。私にできることはないかしら」

「俺は川にいきたいんだ」

やさぐれ魚は答えました。

「俺をのせていけないか？」

カラスのお母さんは迷わずに答えました。

「お安い御用ですとも！川はもうそこですよ。すぐに乗せて行ってあげましょう」

やさぐれ魚はよろこびました。

「それはいい！よろしく頼む！」

やさぐれ魚を背中にのせて、カラスのお母さんは飛び立ちました。

もうすっかり太陽は顔を出し、下に広がる町には人間のすがたもちらほらみえます。

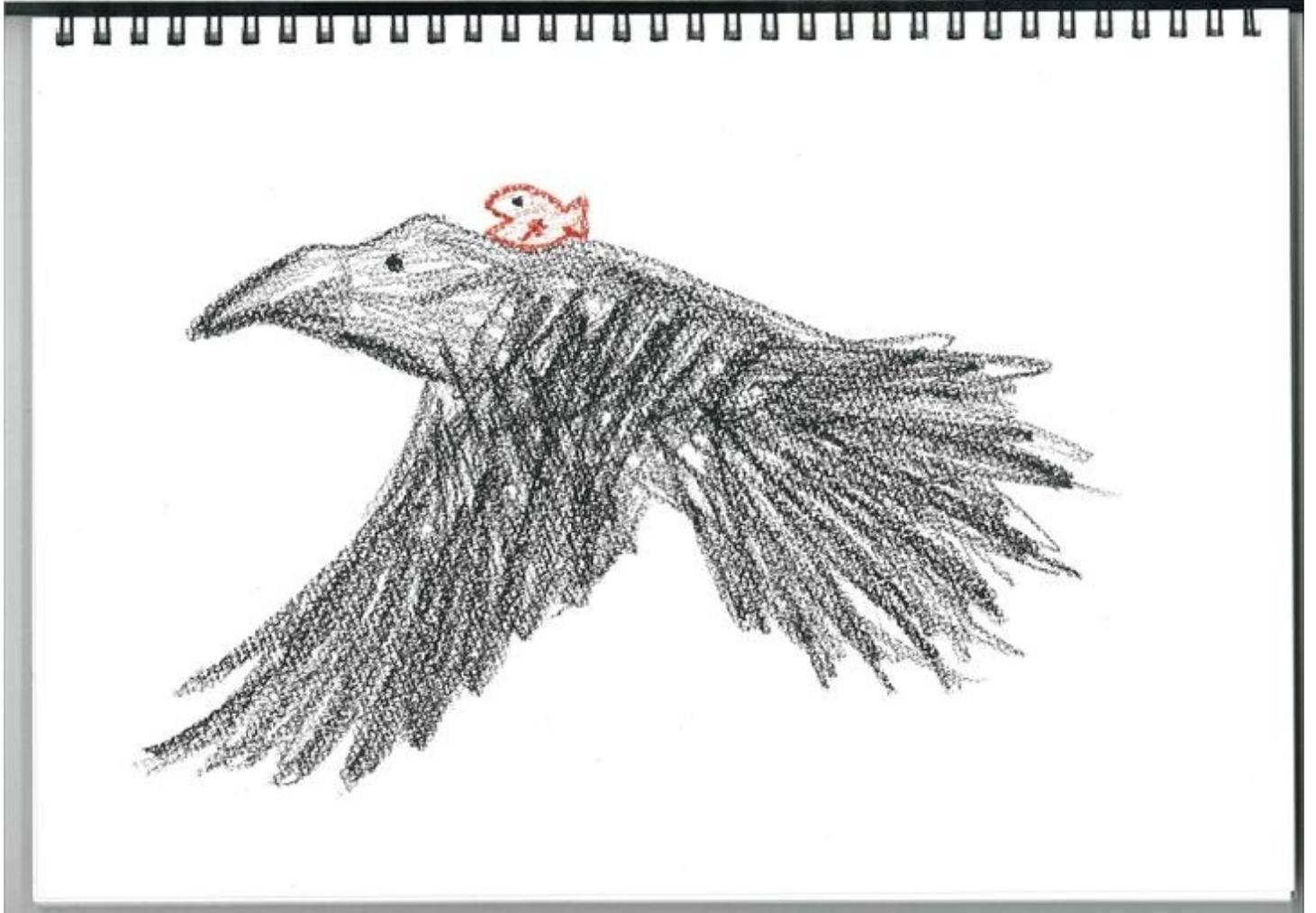
「ほら、もうすぐそこですよ」

と、カラスのお母さんはいいました。

「このまま川の上まで行って、あなたをおろせばいいかしら？」

「よろしく頼む！」

と、やさぐれ魚はいいました。



カラスのお母さんは川に向かって、さらにぐんと速度をあげました。

「あら？」

土手に差し掛かったとき、高度を下げたカラスのお母さんがきみょうなものを見つけました。

「何かしら？人間たちが騒いでいるわ」

土手ではそろいの水色の作業ふくをきた人間たちが3人、一匹のキングペンギンを追い回してい

ました。

一人は手に大きな虫取り網のようなものをしっかりとにぎり、キングペンギンを追いかけてながら振り回しています。

残りの二人はキングペンギンの向かう川のほうに回りこみ、二人がかりで大きな網を広げています。

「リカルド！」

やさぐれ魚は叫びました。

やさぐれ魚海をめざす

「カラスさん頼む！あのひとは俺の命の恩人だ。こんなところで人間につかまっちゃいけないひとだ！」

「分かったわ！」

カラスのお母さんは勇敢でした。

ぐーんと旋回すると、一直線に、網を振り回している水族館職員の顔めがけて急降下しました。

「わあ！」

突然のカラスの襲撃に、ペンギンを追いかけていた水族館職員はのけぞり、思わず手に持った網を取り落としました。

後ろの異変に気づいたキングペンギンは、行く手に張られた網のすぐ横をすり抜けて、水しぶきをあげて川に飛び込みました。

「ああ！」

水族館職員たちは思わず声をあげましたが、後の祭りです。

キングペンギンは故郷の南極を目指して、ゆうゆうと泳ぎ去りました。

その後を小さな小さな、ちょっと尻尾のかけた魚のクッキーが、まだ見ぬ大海を目指して泳いでいきました。

To be continued Yasagurezakanano-Boken2